

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム報告書2008～2013年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-15 キーワード (Ja): NDC9:160.4, NDC9:161.3, 宗教, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001576

ウェブ経由の神道・日本宗教 —インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—

黒崎 浩行

開催概要

第1部 研究者フォーラム

【日時】2008年10月26日（土）10時～12時30分

【場所】國學院大學学術メディアセンター5階 会議室06

【パネリスト】

Carl Freire (University of California, Berkeley, USA)

Erik Schicketanz (東京大学)

Laurent Godinot (INALCO, France)

岡田昭人 (東京外国語大学)

加瀬直弥 (國學院大學)

平藤喜久子 (國學院大學)

【コーディネーター】

黒崎浩行 (國學院大學)

第2部 国際研究フォーラム

【日時】2008年10月26日（土）14時～18時

【場所】國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【発題者】

Alan Cummings (SOAS, UK)

Michael Wachutka (Tübingen University, Germany)

Jean-Michel Butel (INALCO, France)

【コメンテーター】

師茂樹 (花園大学)

渡辺学 (南山大学)

【司会】

井上順孝 (國學院大學)

【プログラム】

14:00-14:10 趣旨説明 井上順孝

14:10-14:40 Alan Cummings 「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」

14:40-15:10 Michael Wachutka 「ドイツ語圏の日本宗教研究と教育：インターネットは教材・学材として使えるか」

15:10-15:40 Jean-Michel Butel 「日本の宗教及び文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをよりよくするために」

16:00-16:20 コメント 師茂樹

16:20-16:40 コメント 渡辺学

【趣旨】

大学教育の現場においても、また研究を推進するうえでも、ウェブ上に存在する学術情報の適切な活用は、大きな課題となってきた。インターネット上の情報はしばしば信頼性に問題があり、また匿名性が強い責任の所在が不明なことが少なくない。その利用に当たっては慎重さが求められることは言うまでもない。しかしながら、ウェブ上の学術情報がまさに日進月歩であることは疑いがなく、この現状を無視しての教育・研究は考えられなくなってきた。

2002年度から2006年度までの5年間にわたり國學院大學で実施された21世紀 COE プログラムの研究の一環として、オンライン英文神道事典 EOS (Encyclopedia of Shinto) を作成し、同時に神道・日本宗教の研究を推進するための国際的な研究者ネットワークを形成した。現在は総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」によって、これをさらに展開させるため、いくつかの試みを実施している。EOS では、視覚的にアプローチできる初心者用のサイトを構築しつつあり、また神道関連の論文を日本語から外国語へ、外国語から日本語へと翻訳してオンラインで公開するなどの事業も展開している。

今回の国際フォーラムは、この総合プロジェクトの趣旨に従って開催されるものである。研究者の国際的ネットワークを広げながら、神道や日本文化に関わるデジタル情報を日本語や外国語を用いてウェブ上に発信していく上での問題点を具体的に明らかにし、神道・日本宗教の研究・教育が深まることを目指している。

さらに、ここ数年、高等教育における宗教文化教育の幅広い導入の必要性が検討されるようになってきている。これは多くの国々において議論されるようになってきており、グローバル化が進行する世界において、非常に重要な課題となってきた。ウェブ情報を研究・教育にどう用いていくかに際して、宗教文化教育という観点からは、どのような問題が浮上するかという視点も設定されることになる。情報時代は研究と教育がいつそう密接に関わっていくように作用する。宗教文化教育を行なうとすれば、どのような教材が求められるか、そのためにどのような研究が必要となるかなど、多様な問題が控えている。現在直面している具体的な課題をとりあげながら、幅広い視野からの議論を期待したい。

なお、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所総合プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(研究代表者 井上順孝國學院大學教授) が主催し、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者 星野英紀大正大学教授) が共催する。

【会議概要】

第1部 研究者フォーラム

開催にあたり、井上順孝(國學院大學)より趣旨説明を行った。

この企画には、二つの経緯がある。一つは、國學院大學が平成14年度に文部科学省の21世紀 COE プログラム研究拠点に採択され、「神道と

日本文化の国学的研究発信の拠点形成」というテーマを掲げて、神道を中心とする日本文化の国際的発信を行う、そのための施設と研究体制を整えたこと。もう一つは、日本宗教学会、「宗教と社会」学会を母体として、大学における宗教文化教育の推進を行うプロジェクトが立ち上がったこと。この二つが交錯するところにこのフォーラムを企画した。

神道・日本文化研究のコンテンツとネットワークにわれわれはどのように国際的に貢献できるのか。宗教文化教育という、価値観に関わる難しい課題を抱えたテーマについて、各国の取り組みがどのようなものであるかという情報が行き交うなかで、われわれはどのように進めるべきか。この二つが合さるところに今回の企画を立てた。

第1部ではざっくばらんに、研究者どうして自由にアイデアを出しあう。これから先のビジョンについてイマジネーションを膨らませ、共有する。

第2部では、日々教育に関わっているなかで、現実的に着手しており、具体的に見える方向、選択肢を探る。

以上のような企画趣旨をふまえ、6人のパネリストがそれぞれの経験、意見を述べた。

Carl Freire氏は、上智大学で日本史入門の授業を担当しはじめたばかりという立場から、教育に有用なインターネット上の情報として、博物館のウェブサイトで公開されている、専門家による説明が加えられた画像資料と、American Academy of Religion (アメリカ宗教学会) のシラバス・プロジェクトのように授業の組み立てに役立つ情報を挙げた。

Erik Schicketanz氏は、多くの人たちが日常的に利用しているサイトを有効に活用することを提案した。まずYouTubeを例に、学術的な文献を読んでいるさいに「冥婚」という中国の宗教儀礼が気になり、検索してみるとその映像が見つかり、理解が深まったことを挙げた。また、こうしたポピュラーなサイトの影響力を考慮し、映像の説明部分に、EOS (Encyclopedia of Shinto) の記事へのリンクを張るなどして、専門家が発信する情報につなぐとよいと提案した。

Laurent Godinot氏は、神道・日本宗教の政治・経済との影響関係について情報を見つけることがきわめて難しいという。それに比べフランス・カトリック司教会議のサイトには「教会と社会」という項目があり、サブプライムロー

ンの危機について、移住についてなど、さまざまなテーマについてカトリックの意見を述べている。このようにさまざまなテーマについて神道の意見を述べるサイトがあれば役立つと述べた。

岡田昭人氏は、東京外国語大学国際教育プログラム (ISEPTUFS) の取り組みを紹介し、そこでのインターネット利用について問題点を指摘した。ISEPは1年間の学生交流プログラムで、日本人学生と留学生が共同学習するのが特徴である。日本語教育と国際教育の授業を行い、すべて英語で教育する。

国際理解教育として、インターネットを利用したりサーチ・アンド・プレゼンテーションを行っている。かつて行った課題に、「神社とお寺の違いについて」がある。この課題は日本人学生でも知らないことが多いという。

問題点として、学術的ではないサイトがたくさんあり、それを利用する学生も多い。また、コピーも問題になる。そこで、インターネットを利用するさいの明確なガイドラインが必要になる。

加瀬直弥氏は、21世紀 COE プログラムで「神道・神社史料集成」データベースを作成、公開した経験から、学術情報を教育に還元する必要性について述べた。

一般に神道について関心のもたれるテーマは靖国問題・政教問題であったり、明治神宮のような神社の姿が一般的なイメージであったりするが、神道・神社は歴史的にみてもまた現在でもさまざまな要素が複雑に絡み合って形成されている。その事実の積み重ねをどれだけ提供できるかが課題であると考え。インターネットには、全国の神社をくまなく歩いた人のサイトなどがあるが、そこには本人の意見なども込められており、授業に使うのは難しい。歴史だけでなく、現代の神社をできるだけ多く提供することが必要であると考え。

平藤喜久子氏は、岡田氏と同じく東京外国語大学の ISEP のプログラムで「日本の社会と宗教」という演習形式での授業を担当している

が、その経験をふまえ、外国人の学生が日本の宗教を学ぶのに有用な情報、サイトを提案した。

この授業は、今の日本社会で話題になっている宗教について正しい知識を得てディスカッションすることを目標としており、20名程度が受講し、その3分の1が日本人である。学生に新聞・雑誌・インターネットの宗教関連記事を紹介してもらい、どうしてそれを選んだのか、何が疑問なのか、自分はどう考えるかを発表してもらう。ほとんどの学生がインターネットから記事を拾ってくる。

これまでに取り上げられたテーマのなかで、一番盛り上がったのは、「日本の僧侶」。タイの学生は、日本の僧侶が肉食妻帯することに驚く。

留学生たちは、今の日本人が感じるイメージに関心を持っているが、それを知るために、Japan Forumという相談サイトにアクセスしている。このサイトには、日本に対するいろいろな疑問が投稿されている。日本のムスリム、キリスト教についての情報も載っている。しかしそれらの情報には不正確なものや主観的なものが多い。お坊さんの生活について、ブログなどを見ると、ベントに乗っているとも、カブに乗っているとも書かれている。お金持ちなのか、貧乏なのか混乱する。

そういったときに日本の宗教の現状がわかるサイトが乏しい。そこで参考になるのがアメリカの世論調査会社で作っている「宗教と国民生活に関するピュー・フォーラム」(Pew Forum on Religion and Public Life)。州ごとにどの教団の信者が多いかがグラフで出ている。死刑制度や同性婚についての世論調査結果も出ている。各宗教の死刑制度についての意見、アメリカ人がどのくらい死刑に賛成・反対しているか、その人たちの宗教的立場も見ることができる。こういうものを参考にしながら、今の日本人の宗教意識について知ることができるサイトがあれば、有益だと思う。

自由討議では、師茂樹氏(花園大学)、久保田浩氏(立教大学)、菅浩二氏(國學院大学)、

Alan Cummings氏、櫻井義秀氏(北海道大学)らも加わり、意見を交わした。

師氏は、宗教の文脈では何を「正しい」とするかが何通りもあり、この場で議論するさいに何を「正しい」とするかを詰めておいたほうがいいと提言した。これに対し井上氏は、ここでは研究機関で作る情報の学術的な正しさということであり、また教団などが発信している価値観を含む情報に接したときの判断力の正しさを教育するということも含む、と応答した。師氏はそれをふまえ、判断力を養う教育のための情報提供のアイデアは何かあるかと問題提起した。

久保田氏は、市井の人たちがさまざまな情報を発信するということそのものを現代の宗教文化を知るための資料として扱うというリテラシーが必要ではないかと述べた。これに対し平藤氏は、学生たちが相談サイトを利用しているのもその例にあてはまるが、しかし実際に知りたいのは、いろんな宗教文化のイメージがあるということではなく、日本での一般的なイメージを知りたいということであり、そのためにどのように導いていったらいいのが難しいと応答した。

Freire氏の例示したようなシラバスの公開について、岡田は諸外国でのファカルティ・ディベロップメントの取り組みが日本でも導入され活性化しつつあることを紹介した。

学生によるネット情報のコピペについてCummings氏は、コンピュータに慣れている若者にとってコピペは基本的な操作であり、文章を読解して自分なりの意見を抱くという学習のプロセスを経験していないため、どうして悪いのかがわからないことが問題だと述べた。また井上は、コピペをさせないよう学生を指導する教員の力量が必要だと説いた。

櫻井氏は、インターネットで収集した情報が外れ値かもしれないのに代表的な情報と思い込んでしまうことが起きているという。タイのお坊さんで検索すると出てくるのは、偉いお坊さんかスキャンダルのお坊さんであり、一般的

な村のお坊さんの情報は出てこない。しかし日本のお坊さんと比較して典型的なイメージを作ってしまう。そこで研究者が参画してどのようなことができるかと問いを投げかけた。

平藤氏と Schicketanz 氏、Freire 氏はウィキペディアの記事から EOS にリンクを張るなど、広く使われているサイトから専門的なサイトにたどりつきやすくする工夫を唱え、また Freire 氏はアメリカの大学での例としてウィキペディアを正しい書き換えるプロジェクトを紹介した。

井上氏は、学術的な情報にアクセスする方法を伝えることが重要であり、そのためにはさまざまな宗教に関するコンテンツを充実させて相乗効果を生み出すことが必要だとした。

師氏は、大学でリテラシー教育が行われうる場と、より広い場とを分けて考える必要があるだと説いた。現在ウィキペディアやYouTubeに投稿することは、大学の教員、研究者としては全く評価されない。広い目での社会的な教育活動について、労力に見合う評価をする仕組みを構築していくべきだと述べた。

第1部はここでいったん終了し、いくつかの論点は第2部での議論に引き継ぐこととした。

第2部 国際研究フォーラム

1. 趣旨説明

井上順孝

この国際研究フォーラムは、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催、科学研究費「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」との共催となっている。

いろいろな分野でインターネットの影響は大きくなっており、その中で研究、教育をどう展開していったらいいのか、非常に大きな問題となっている。

第1部ではウィキペディアについての議論が出たが、学生たちは、本を読むよりもウィキペディアで情報を得る割合が非常に高くなってい

る。昨年度、「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと日本文化研究所のプロジェクトが合同して行った学生へのアンケートでは、「ウィキペディアを知らない」という学生が、調査時点（2007年4～6月）では26.1%、「知っている」という人は残りの7割だが、その中で「正確な記事が多い」と選んだ人が35.6%いた。ということは、「知らない」という人を除いて半数近くは、正確な記事が多いと考えている。この影響は無視することができない。

ではそれに一体どういうスタンスで臨んだらいいのか。この課題は、一教員あるいは一研究期間で対処できるものではない。インターネットが今までにないネットワークの仕方をつくったとするならば、教育研究に携わる側も、その利点を使うという発想で臨まなければ、学生たち、専らネットを使っている人たちとの距離がどんどん開いていく。そういう意味で研究者、研究機関、そして国際的な関係において、ぜひネットワークを築いて、今後どうこれに対処していったらいいのか、そういうことを考えたいということが背後にはある。

当面我々に迫っている課題は何だろうかということについて少しでもフォーカスが定まってくればうれしい。

2. 「日本古典芸能の教育におけるインターネットの可能性」

CUMMINGS, Alan

[発題]

我々が勤めている大学や教育機関の多くが、この数年、情報革命に本格的に乗り出している。我々教育者が担当しているコースのデジタル化も進んでいる。

情報革命は、教育者たちに新しく煩わしい仕事を確かに増やしているが、その反面、学生たちにも見落とされがちな影響も与えている。つまりインターネットの普及によって、学生たちの学習法も研究の仕方にも変わってきている。データの検索、評価、解釈というプロセスは、

アナログの世界の場合とデジタルの世界の場合で全く同質のものであると思っはいけない。特にグーグルという検索サイトの成功によって、学生による情報の探し方と利用の仕方が、驚くほどのペースで変化しつつある。今の多くの学生は、図書館や活字印刷されている文献や書物ではなく、インターネット検索エンジンで情報を探す。

だれでも自由に発言できるデジタルスペースに慣れている現在の学生にとって、査読制度を取り入れている学会誌の世界はわかりづらい。オープンの世界とクローズの世界の違いでもある。デジタル世界においてコピー・ペーストという基本的な操作が、剽窃になるという意識すら持っていない学生も増えてきている。すべてオンラインからデータをとって論文を書いている学生が、この数年で増えてきている。

我々の研究過程の中で、データを探し出すこと、そのデータの質を分析すること、適切と判断したデータに基づいて何かを結論づけること、そういう3段階があるとしたら、インターネットによってその第1段階が非常にしやすくなった。しかし、情報を探すことだけで満足して、その分析や理論形成まで至らない傾向も感じている。

グーグルの検索結果のランキングは、人気度やバックリンクなどによって判断されているのだが、それがすなわち情報の信頼性、関連性をあらわしているという勘違いをすると、学生の学習自体がとんでもない方向に行ってしまうおそれがある。

私たちは今まで学生にアナログ資料の選び方や評価の仕方を教えてきたが、これからはデジタル資料の評価の仕方も課題になってきている。情報リテラシー、ウェブリテラシーといったスキルを学生に教えるなくてはならない。

私は実際に、学生にインターネット資料の使い方を紹介するとき、8つの基本的な質問を聞くことから始めている。すなわち、この情報はだれが書いたか、その人はどのような専門知識

やどのような権威を持っている人なのか、資料が使われているのか、どういう資料が使われているか、その印象がちゃんと書いてあるか、サイトのスポンサーはだれなのか、結局だれがお金を出してこのサイトをつくっているのか、それは個人なのか団体なのか組織なのか、それがいつつくられたものなのか、つくられた背景は何なのか、どのような読者が設定されているか、どのような議論がされているか。この質問を聞くことによって、知らないサイトの信頼性のある程度まで評価できるようになってくる。

インターネットのもう1つの可能性は、クレイグ・ストループが指摘する、ハイブリッドリテラシーを涵養することである。それは、書かれた文字のみならず視覚的なもの、聴覚的なリテラシーの意味も持っている。

私が研究している日本の古典芸能、歌舞伎は、ハイブリッドリテラシーを研究するとき、1つのいいケーススタディーを提示してくれている。

近年、歌舞伎についてのオンライン資料が増え、特に、研究者にとってうれしいこととして原資料のデジタル化とデータベース化が進んでいる。役者絵、番付、評判記、演劇評など、江戸時代の歌舞伎の原資料が豊富で、海外で研究しているとアクセスすることが難しい資料がオンライン化、デジタル化されて、非常に便利な時代になっている。有名なものに、早稲田大学の演劇博物館のサイトがある。国立劇場にも同じような検索システムが最近設けられている。特に検索オプションが充実していて、新しい研究の方法が切り開かれている。学術目的ならば高画質の画像を自由にダウンロードして使えるようになってきた。

しかし学生にとっては使いづらいものでもある。学生が使える資料として正確さは大切だが、アクセサビリティと使いやすさという基準も非常に大切である。ウェブサイト制作側としては、利用者像と利用目的をはっきりとつかまないと、ウェブサイトが機能しない。

私の場合、インターネットを通して歌舞伎を紹介することで、ハイブリッドリテラシーを育成することが、教員としての1つの目的にもなっている。歌舞伎は宗教と同じく、言葉を読んで理解するよりも体験して理解しなくてはならない。しかし残念ながらそのように考えているサイトは非常に少ない。

その理由の1つとして、近代化においてでき上がった歌舞伎の二面性がある。それは商業演劇としての性格と、保存すべき古典芸能ということである。歌舞伎を管理・保存する団体はいくつかに分けられている。行政側では文化庁や独立行政法人日本芸術文化振興会、民間側には松竹株式会社、役者側では俳優協会や伝統歌舞伎保存会もあって、いろいろな団体がかかわっている。

各団体が、日本内外で歌舞伎の理解を深めようとしてインターネットサイトを作っている。しかし、積極的に海外の人たちに紹介しようとしているのはまだ少ない。近年では、海外公演する歌舞伎役者が増えてきた。坂田藤十郎はイギリス、アメリカ、中国、市川海老蔵はイギリスとフランス、中村勘三郎はアメリカ、ドイツ、ハンガリーなどで活動している。それにもかかわらず、英語で情報発信している役者はほとんどいない。

では海外公演から実際に利益を得ている松竹株式会社の場合はどうか。英語で出ている資料はわずかであり、10年前につくったような感じを受ける。

それでは行政側はどうか。外務省は出版社の講談社と一緒に「The Virtual Museum of Japanese Arts」というサイトを運営している。その中に芸能というカテゴリーがあり、歌舞伎の紹介が入っている。そちらは少しだけ音と写真、テキストの紹介があり、12本ほどの有名な芝居の説明がある。言葉による説明が多く、写真が入っていることだけが1つのメリットで、学生に紹介しても、何とか勉強になる。

日本芸術文化振興会という国立劇場や新国立

劇場を運営している独立行政法人のサイトは、日本っぽいフロントページで、たくさんのいろいろな情報が載っているが、英語で読めるのは唯一 ENGLISH というページになっている。「What is 歌舞伎／文楽？」をクリックすると英語のめっちゃくちゃなページが出てくる。「It explains what one the kabuki is easily !」、何となく意味はわかるが。花道やかけ声について説明があるが、どういう基準でこういう言葉を選んだのか初心者にはわからず、目的が不明である。

しかし「NOH & KYOGEN」や「BUNNRAKU」「KABUKI」というところをクリックすると出てくる「Invitation to Kabuki」というサイトは、ほんとうに内容が充実している。歌舞伎の意味から歴史、舞台、表現方法、レパートリーなど幾つかのわかりやすい分野で書いてあり、その中の説明もちゃんとしている。初心者にもわかりやすいような明確な説明で、文字と画像と、動画、音声も入っている。歌舞伎が実際にどういうふうに演じられているか見ることができる。ハイブリッドリテラシーは、視覚的な理解と文字に対する理解、聴覚的な理解が同時に行われるという概念だが、日本の歌舞伎を紹介しているサイトの中では、これが一番いい。

また、このサイトでは日本芸術文化振興会がテキストを作成し、資料は松竹や東京国立博物館、京都国立博物館、東京都立図書館などから借りているということも明確に書いてある。ただ惜しいのは、ビブリオグラフィーに日本語の資料ばかりを紹介している。英語の資料も紹介してほしかった。

今の学生は、2～3歳のころからメディアに育てられている。ウェブサイトをつくるとき、テキスト中心のコンテンツだけを重視しては、彼らにとっておもしろいものができ上がるはずがない。これからは視覚的なものにも聴覚的なものにも、学生の感性やさまざまなリテラシーがどういうふうに対応し合っているのか、どういうふうに関連し合っているのか、ウェブサイ

トをつくる時、そのことを忘れてはならない。

【質疑応答】

【質問A】「Invitation to Kabuki」のビブリオグラフィに英語の文献が載っていないことに関して、ウェブマスターにメールを送ってこういった資料もあるというサジェスチョンをされたかどうか。インターネットには双方向の交流があり、研究者も気がついたところはアクセスしてよりよいものにしていくというのが、これからの研究者の社会貢献だと思いがいかか。

【カミングス】まず、いままでの歌舞伎のサイトに画像などの点数が乏しかったのには、著作権、肖像権の問題があった。数年前、大英博物館のためのウェブサイトで、収蔵品をもとに、イギリスの子どもたちに歌舞伎を紹介したいというアイデアがあり、写真を載せたかったが、その許可をもらうだけでも非常に大変だった。

このサイトがこんなに充実しているのは、2005年にユネスコの世界無形文化遺産に歌舞伎が選定され、国際的な発信のために松竹と役者と行政側が協力しなければならなくなったため、最近のことである。いずれ英語での歌舞伎の文献のリストを送ろうと思う。

【質問B】歌舞伎は観客と役者との一体感がある芸術であり、観劇の場をネットで表現するのには限界がある。歌舞伎に行きたくするような効果のあるウェブサイトをつくる努力が必要になるのではないか。

【カミングス】歌舞伎に限らず舞台芸術は、観客と役者が同じ時と場所にて、その中ででき上がるひとつの経験だが、歌舞伎の歴史を考えるとそれだけではない。例えば役者絵を見ることによって、この間見た公演を思い出す、舞台を思い出す効果がある。役者の声色をまねたり、茶番のようなものもある。インターネットを通して、役者とファンとの関係を深めることはできる。1年ぐらい前から始まった松竹の「歌舞伎美人」というサイトは、毎週のように歌舞伎の情報をファンに送っている。外国人に向け

ても同じようなことがこれから始まればいい。

3. 「ドイツ語圏の日本宗教研究と教育：インターネットは教材・学材として使えるか」

WACHUTKA, Michael

【発題】

教材という言葉は、教師が教室で教えるための材料をあらわすが、それに対して「学材」という聞きなれない言葉は、学習者が中心になって教室以外の場で特に情報を探すための材料を示す。学生たちの日本宗教に対する意識についてのインターネットを通じた学習や文化の意味を考えるさいには、両者を分けて検討しなければならない。

ドイツの日本学と日本宗教研究で教材・学材として使われているウェブサイトと、インターネット上の日本宗教教育に関する取り組みを紹介したい。

ドイツにおける日本学の歴史は、元禄時代に日本に滞在したエンゲルベルト・ケンペルまでさかのぼることができる。彼の『日本誌』第3巻は、細部にわたって日本の宗教を詳しく記述しており、今でも注目に値する。本格的な日本と日本の宗教についての学問の時代は、19世紀の終わりから展開した。カール・フローレンツは25年間、東京帝国大学でドイツ文学及び比較言語学の正規の教授についた。既にドイツでサンスクリットとヴェーダの研究で博士号を取得していたフローレンツは、文献学的研究方法を日本学へ導入し、1898年には『日本書紀』神代巻の注釈研究である「日本の神話」によって、外国人として初めての文学博士号を授与された。帰国後、1919年に出版された『神道宗教の歴史的起源』は、今日もなお高い評価を得ている。

現在のドイツ語圏の大学では、オーストリアとスイスの各1校を入れて全部で21校の大学で日本学という専攻をとることができる。そのほとんどは文学部の中に1つの研究室として存在し、教授が平均2人いる小規模な研究教授機関

である。ドイツでは宗教が伝統的な日本学の重要な分野の1つとしてあり、日本文化全体の1つの大事な要素と見られている。しかしながら、大学に在職する教授の専門領域をざっと分類してみると、歴史、文学、語学、社会学、経済という5つの分野で33人を占めるが、宗教の専門はたった3人である。しかし大学での授業の分野としては、日本の宗教とりわけ神道と仏教の歴史と現状は常に安定した位置に置かれ、日本学入門クラスで多少なりとも扱われることが多い。

宗教そのものを客観的に把握することはそれほど容易なことではない。日本学の文化学的方法は、自分の信仰の真実に立脚している神学の方法と根本的に違う。宗教体系の教義、典礼、儀礼などのある時点での役目と社会的な影響を、解釈学的に分析する。

しかし西洋圏において日本宗教の教育に携わる場合には、1つの阻害問題が生じる。分析対象である宗教及び日本文化は、観察者が無意識的に理解できる自分の宗教や文化に類似したものではなく、学生たちにとって異質なものが多い。例えば、日本における宗教の信者数は、日本の総人口の2倍弱になる。これは多くの日本人が七五三や初もうで、あるいは季節の祭りを神社で行い、葬式やお盆などは仏教式で行うなど、複数の宗教にまたがって年中行事の祭礼に参加しているためだが、キリスト教が基盤であるヨーロッパでは、洗礼を受けた時点でその宗教の信者になることを考えると、かなり異質なものである。彼らに日本の宗教について教えるときは、まず宗教の分類を紹介しなければならない。もちろん伝承や宗教性が描かれている「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」のようなアニメ映画は、初めて日本の文化や宗教などのテーマに興味を持たせるきっかけとなる。ただし、感じた宗教的な要素が漠然としているので、民俗宗教と世界宗教、聖なる法をさとする修行を通じて解脱する無神的宗教と、有神の宗教に包括される多神教、精霊崇拝、唯一神教、多

神の中に最高神が存在する単一神教などの宗教分類と概念について教えたりすることが必要である。

インターネットは我々の行動し交流するパターンとともに研究するパターン、文化をも完全に変えつつある。1つの大きな問題点は、グーグルのような普遍的な検索エンジンがあるために、学生が批判的に分析的に考える能力を修養して、主体的に何かを勉強する必要が生じなくなっている。イギリスのブライトン大学のメディア学者、タラ・ブラバゾン、この傾向を「研究は検索になりかわりつつある」と言っている。彼女は「グーグルは精神的精白パンである」、すなわち腹の足しにはなるが、栄養が足りないと言い、受講者に対してグーグル及びウィキペディアの使用を禁止した。

そこまでインターネットに反対する必要はないと思うが、学生たちがインターネットですべての情報を無作為に探し、参考にしていないことは問題である。授業でインターネットを教材・学材として使いたいときはまず学生に、情報化時代に向き合うための基本的な足がかりを与えなければならない。学生たちがサイトの精度、信憑性、客観性、適応範囲などを常に考えることを教えなければならない。

授業の中では、テーマに合うときには、例えば神社やお寺のホームページを紹介している。学生たちにとっても資料として使われ得るものだが、日本語という壁もあり、なかなか自由に使いこなすことは容易でない。

ウィキペディアも確かに学生にとって重要な情報源になっている。ドイツ語版にも日本の宗教に関する項目がある。詳しい概論記事もあるが、浄土宗の項目のように不完全なものもある。内容の質を改善するために、学生たちが特定の話題に関する記事を修正し、もしくは新しい記事を書くことを教育部門のねらいに定めることもできる。

日本にまだ行ったことのない学生たちに日本の宗教を説明するときとても便利なのは、儀式

についての幾つかの映像がユーチューブで見られることである。神式の結婚式や仏教の読経式など興味深い映像がある。普通のビデオドキュメントにもいいものはあるが、長過ぎるので授業にはほとんど使えない。ユーチューブにあるコメントなしの5分ぐらいの生映像はちょうどよく、生きた宗教や儀式を見せながら教えることができるようになりつつある。しかし、いいものは少なく、見つけるのは時間がかかります。

インターネットを使つての情報について、教師はしばしば教える側ではなく教わる側になる。実際に学生のゼミの発表を通して、ユーチューブと類似のキリスト教専用であるゴッドチューブというサイトを知ったことがある。日本の宗教についても同様の専門映像サイトがあれば、授業においてはとても役に立つだろう。

もう1つの便利なサイトは、マーク・シュマッハの「日本の仏教と神道の諸尊や神々の写真事典」である。神道と仏教に関する部分に分かれており、たくさんの写真と、それを詳しく説明するテキストが載せられている。授業であるテーマの要点を説明するために、私はよく利用しており、学生にも勧めている。

テュービンゲン大学日本学科の教授、クラウス・アントーニは、2000年に「インターネット上における日本宗教の自己表現と自己理解」と題するプロジェクトを立ち上げた。この2年間の研究プロジェクトの目的は、ドイツ語圏内で日本宗教に関心を持ち、学術的研究に取り組んでいる人々のために、インターネット上の日本語の宗教的ウェブサイトに関するリンクリストと、要約された情報によって情報プールを提供することであった。2002年のプロジェクトの終了後、このリンクリストは存続したが、継続的に拡充されることはなくなった。しかし2003年からはリンクリストが「巫術の概念をめぐる日本におけるインターネットシャーマニズム」という新しいプロジェクトの基礎として用いられ、約1,750のリンクも拡充された。授業でとりあげることはほとんどなかったが、数人の学

生は、その取り組みのおかげでインターネット情報を研究対象とし、また資料として、インターネットにおける日本の宗教とその概念の研究課題として取り上げた。2007年に出版された、修験道と役行者に関するウェブ上の情報及びその伝説の連続や非連続を分析した「サイバー山伏」という修士論文は1つの例である。

また、ベルリンの国立図書館は、東及び東南アジアに関する電子資源と情報への総合アクセスを用意する「クロスアジア」という専門サイトへのデータ移行を去年から行っている。テュービンゲン大学で担当している日本の宗教のリンクリストが修正されて、クロスアジアサイトの主要構成要素である「オンラインガイド東アジア」というデータベースに変わっている。そのデータベースは絶えず追加されていくもので、コメントをつけて歴史、法律、文学、地理、哲学、宗教などの分野に分けられたサイトのコレクションになっている。クロスアジアへのデータ移行は、最新のデータベース技術を用いることにより情報プールの管理が単純化され、リンクされたウェブページそのものをアーカイブして、長期保存できるようになっている。

学者にとって情報源としてのインターネットの一番便利なところは、電子化された資料、つまり自由に利用できるインデックスが増え、ダウンロードでき、オンラインで使えることである。国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」は、日本学者にとってとても役に立ちます。しかし、二年生にはまだ日本語の壁があり、やはり視覚資料がほしいところである。

ベルリン市の東洋美術館が掲げた「熙代勝覧」のマルチメディアプロジェクトも紹介したい。インターネットではなく、PC及びイントラネットだけで利用できる。「熙代勝覧」は今から200年前、文化2年の絵巻物で、現在の東京の中央通りのうち、今川橋から日本橋までの繁華街を表現している。1,000人以上の人々、何百軒もの建物や店、多数の茶店及び飲食店など、当時の江戸の最も重要な商店街のにぎわい

を描き出しており、このマルチメディアプロジェクトを使うと、オリジナルの絵巻物がインタラクティブに経験でき、より詳細な情報にもアクセスできる。宗教を含めて江戸時代の日本の文化について教えるとき、説明が簡単になり、学生たちにも授業がずっと面白くなった。

ドイツ語圏の日本宗教の研究に関する1つの深刻な問題は、幾つかの日本の宗教にはあらゆる面についての詳細な本がある一方で、初心者に適した資料のための教科書は1つもないということである。それを埋めるために、オーストリア科学アカデミー「日本における宗教」というオンラインハンドブックを2001年から提供した。7つの章からなり、基本的な用語や概念についての導入的説明、寺と神社、日常生活と事項、風俗学、神話と伝説、日本の宗教の沿革、そしてソーステキストという項目が説明されている。「神棚」という項目では、お供えの仕方がいろいろな挿絵を使って紹介されている。青色でマークされた言葉をクリックすれば、対応する漢字と簡単な説明がポップアップされる。墓地と墓の項目には、高野山及び五輪塔の墓石についてのもっと詳しい説明があるページへのリンクがある。参考文献も載っている。

ドイツ語圏の日本学には、宗教に関する研究の長い歴史があるが、日本の宗教に関する教科書的な入門書は全然ない。こんな状況で情報を探すためには、教授としても学生としてもインターネットを使う利点は確かにある。そして教育で教材・学材として使えるウェブサイトは、ここ一、二年で特に増え、充実してきた。「Web2.0」という用語でくくられる、ウィキペディアやユーチューブなどの代表的なサービスは、2005年以降にしか成り立ち得なかった。だれもが双方向に情報を共有できるこれらのサイトは創造性を向上させ、利用者へのサービスを重視するからである。利用者が増えれば増えるほど提供される情報の量が増え、サービスの質が高まる傾向にある。こうした中で、wikiによる文書作成システムや学内チャットルームな

どを利用して、学生たちが授業の内容を議論したり、教師がコメントしたりすることができる。Web2.0とともに、一方向のコミュニケーションである講義やセミナーは双方向的になり、より刺激的な学習環境になる。これからの教育のあり方に焦点を置こうとしたら、そういうインタラクティブな相互作用性のあるサービスを、教育のためにもっと利用しなければならぬ。

【質疑応答】

【質問C】ゴッドチューブというサイトを運営しているのは宗教系の団体か、それとも学術系の団体か。

【ワフチカ】それはよくわからないが、だれでも自由に映像をアップロードでき、利用できるので、1つの団体が責任者ではないと思う。

4. 「日本の宗教及び文化に関する信頼性の高いデータへのアクセスをよりよくするために」

BUTEL, Jean-Michel

【発題】

日本における宗教文化教育という概念そのものがまだよくわからないが、フランスでも10年か15年ほど前から、そういう教育が義務教育の一環として必要だという見方がされるようになった。宗教に関するフランス人の見方は依然として複雑で、簡単にまとめると2つの方向性が見られる。まず、フランス国内に存在する宗教に対しては、無神論が根強くある。逆に、フランスにあまりないエキゾチックな宗教に対しては深い関心を持たれ、宗教は一つの文化のキーだというふうに認められるのが一般的である。言いかえれば、日本の文化を理解するためには、神道について調べたり研究したりするべきだと思っているフランス人は少なくない。日本文化イコール神道と私は思っていないが、初学者はそういうふうに思っている人が一般的だ。

ただ不思議なことに、3年を経て修士課程前

期に入ると、日本の宗教を研究テーマとする学生はほとんどいなくなる。どうして入学当初にあった宗教に対する関心が、希薄化していくのか。理由として1つ考えられるのは、日本の現代社会における宗教のポジションだが、フランスの大学教育とも関係があると思われる。

フランスの大学で日本語を専門として教えている学部の授業の構成を見ると、日本の宗教といった授業がほとんどない。フランス語で、グーグルで「日本宗教」「授業」と打ったら、スイスのジュネーブ大学の授業が出てくる。プロテスタントの影響が強い大学で、日本の宗教を紹介している海外の組織というのは、カトリック教会、プロテスタント教の組織が多い。日本の宗教現象を積極的に取り上げている授業は、修士課程に入ってからのみである。つまり、何も知らないけれども一番知りたいという段階では、フランスの大学、研究者のほうの準備が何もされていない。海外における日本宗教文化教育の対象となるのは、まずこの何も知らない人たちだと思うが、その人たちを対象として書かれた神道入門といったようなテキストブック、資料はない。

そこでまず皆さんにお願いしたいのは、日本語の神道入門書の海外語、フランス語、ドイツ語の翻訳をぜひ積極的に支援していただきたい。日本語で行われた研究を翻訳するための基金があることが、フランスではあまり知られていないし、利用されていない。しかし、本があれば学生が必ずそれを読むとはやはり思えないので、また違う方法を考えないといけない。

今年、このシンポジウムの準備のために、うちの大学の日本語を勉強している400人ぐらいの学生を対象に簡単なアンケート調査をした。アンケートの質問事項は以下のとおり。あなたはどんな方法で日本に関する情報を手に入れるのか、どのようなメディアを利用してデータを集めているのか。結果は予想どおり、書籍は研究書、小説も含めて4番目になり、1位はインターネットであった。テレビ・ラジオも結構大

きかった。

「インターネットに接続する頻度はどのくらいですか」と聞いたら、「毎日のように」という学生は80%ぐらいで、「まだあまり接続できない」という学生が20%であった。容易に接続できる学生の割合は、大学の学年、課程が上がるにつれて高くなり、3年生でまだ接続ができない学生の割合は5%ぐらいになる。けれども修士課程に入ると全員、何らかの形で毎日のようにネットサーフをしている。そして、この変化と並行して本を読む学生も多くなる。インターネットと書物は相互排他的な関係にあるものではなく、逆に大学で上手に育成された学生によって、両者が同時並行的に使用されていることがよくわかる。

次に、「どの資料にアクセスができたらいと思いますか」と聞いたら、「先生がつくったパワーポイント」「授業で配布された資料」「読むべきと言われた論文」「前年の試験問題とその正しい解答」などなど、すべて欲しい、アクセスできないものが何も無いという願望が強いという印象を受けた。「すべて欲しい」「すべてオープンに」というのは、技術の世界の論理、進歩、イデオロギーに支配されていて、我々の立場はちょっと違うかもしれない。

ここに、教育の包含する1つの矛盾がある。学生たちは「すべて欲しい」と言うが、彼らの現実の行動を調べてみると、学生はインターネットをそれほど使っていないようである。修士課程まではネットサーフの仕方は非常に単純で、グーグル、ウィキペディア、アマゾン、ユーチューブが主になっている。結論としては、我々が教育者として学生の集まっているところに入っていけないといけない。我々はグーグル、ウィキペディア、アマゾン、ユーチューブに入らないといけない。

しかし我々が教員として重視していることも主張すべきである。それは、情報の内容の確実さと、資料に対しての批判精神、資料方法論の必要性である。また、断片的な知識で満足せず

に、包括的な資料体系を自分で構築することも必要である。

今挙げた点を具体的に実現するには、資料のデータベースの構造、ハイパーリンクのはり方、最後に各カテゴリーのデータを紹介する必要がある。「こういう問題があるので気をつけてください」とか、「また違う考え方もあります」とか、そういう簡単な紹介が必要になる。

学生のインターネットの使用状況についてはアンケート調査による研究があるが、研究者については何のデータもない。科学人類学や科学社会学、要するに研究者の行動パターンを中心とした研究はまだ少ない。フランスではブルーノ・ラトゥールを起点として、そういった研究が始まったが、日本の言語、文化を研究している者はまだ研究対象になっていない。

ここで國學院大學の学生の皆さんにお願いしたいことがある。フランスに来て、フランスのジャポノロジスト、日本研究者のことを研究してほしい。印象だけを言うと、海外の日本研究者には、英語圏は別だが、単独で、自分でいろいろと工夫をして、フランス語でいうブリコラージュ、手仕事の研究をする人が多い。そういう海外の研究者に対して、日本からインターネットを使ってどのようなサポートが可能になるのか。

私は日本での留学を終えてから西洋に戻って、一番苦しいまたは危ないと思ったのは、日本にいたときは飲みニケーションで入手できた情報が、ヨーロッパに行ったらもう入ってこないということである。学会情報、最近発表された新しい研究、研究と研究者の悪口などなど、ぜひ聞きたい。そのようなポッドキャストをつくってほしい。

私がきょうお願いしたかったことをまとめると、以下の各点になる。神道入門書の外国語翻訳への支援。グーグル、ウィキペディア、アマゾンを通じてすぐれたデータを広くインターネット上に配信すること。一貫性のある知識の紹介を目指すこと。データの生産状況を紹介す

ること。研究者の人類学研究。進みつつある研究のうわさが伝わるスペースをつくること。

【質疑応答】

【質問D（平藤）】神道入門書の翻訳を支援してほしいということだが、英語のさまざまな神道の入門書をフランスの学生は読まないのか。

【ビュテル】英語を読めるフランスの学生の割合は10%ぐらいで、9割は読めない。フランスの日本研究者の半分ぐらいは英語を読めない。それだけでなく、フランスの中世史を専門とする先生が、日本との比較をしたいときにも、英語の研究は読まない。ドイツやスペイン、イタリアとフランスとでは状況が違う。

【質問E】フランスでの読書率とネット利用率の並行した上昇関係というのはどうして生まれるのか。学生への指導の仕方によるのか。

【ビュテル】全社会の現象としては、確かにネットが入ってから読む習慣が少なくなったというのは事実だが、メディアで情報を探したい人はネットを使っても本を使っても同じで、メディアはどれでもいい。ネットは本の敵だ、ネットがあるから人は本を読まないというふうに話していた60歳以上の方は多かったが、それはもう言えない。

5. コメント1

師茂樹

私も大学で仏教も教えているが、さまざまに考えさせられるいろいろなご発表だった。

大きく分けて2点をコメントしたい。

1つは、宗教文化教育について。宗教文化教育が行われる場はもちろん大学のような教育機関であるということは間違いないが、情報の担い手、発信者という面から考えると、必ずしも大学という場に閉じるわけではない。歌舞伎についてのアラン先生のご発表の中で、例えば松竹という会社が肖像権を持っていて、その人たちが情報発信を、ある意味我々から見ると阻害しているように見える状況に触れられた。宗教

もやはりそうで、学術的に我々のように研究をしている立場の者と、一方でその宗教を信じて実践をしている人々との両方が宗教の広い意味での文化の情報に携わっている。

台湾で大蔵経を公開している CBETA という組織があるが、そのデジタルアーカイブには律蔵というお坊さんの戒律に関するテキストがあり、それは実は仏教の中からお坊さんしか読んではいけないことになっている。閲覧する前に、在家者が律蔵を見ることについてという文章が必ず出てくるように最近までなっていた。特定の人にしかほんとうは見せてはいけない情報というものがある。私たちは読みたい、見せてほしいと思うが、一部の宗教に携わっている人からすれば、見てほしくないということもある。歌舞伎について質問があったように、宗教の情報の中でもやはり場というもの是非常に重要で、普通の人がいちゃいけない場というのが当然ある。つまり、情報というのは必ずしも学術目的、教育目的だけで提供されるものではないし、場合によっては学術的な要求、教育的な要求と、その宗教的な要求というものがコンフリクトするような場面は考慮されなければならない。

2つ目はウィキペディアについてで、どなたかがウィキペディアを教育の現場に導入すべきだという意見を述べていたが、私もその意見にとっても賛成で、大学の研究者あるいは教育者は、もっとウィキペディアのような場に出ていくべきだと私も考えている。実際に私自身もウィキペディアに記事を書き、編集している。ただ、その場面においてストレスがたまるのは、専門家のつもりでいる人間が論文1本書くぐらい準備をして書き込んでも、だれかが勝手に書きかえる。それは往々にして、必ずしも学術的じゃない観点から書きかえられていく。客観的ではない特定のグループの視点から書きかえるというようなことがかなり行われている。ウィキペディアは非常に有用だし、学生が最初に入る入り口としてはとても重要だが、あまり

楽観的な考え方を持つのもどうか。

ユーチューブであれば、グーグルがまずいと思った情報はグーグルが消している。グーグルの検索結果も、グーグルがよくないと思った情報は出さないようにしている。

一見自由にアップロードできる環境を提供しておきながら、ある特定の考えに属さないものはこっそり消すこともできるわけで、たくさんの人が参画するような Web2.0 的な世界というのは、楽観的に考えられがちだが、グーグルとかウィキペディアを実際に運営している人たちのコントロール下に置かれているということは押さえていかないとならない。我々はウィキペディアを否定したり、無視したりすることは多分できないが、ウィキペディアというものは、私たち以外の人もかかわっているんだという意識は持ってなきゃいけない。

6. コメント2

渡辺学

イギリス、フランス、ドイツの事例から、ネットが持っているいろいろな可能性、めくるめくような情報の世界を改めて拝見して、驚きをもって接した。

通してみると、1つには宗教情報リテラシーの問題が第1段階として出ていて、それからインターネット上の宗教情報という問題という2段階であった。

つまり、ネット検索によって見つかった情報を無批判にコピー・アンド・ペーストしてレポートを作成し、レポートの出典を書かない、あるいはあくまで参考資料としてしか挙げないという状況がある。そこには剽窃という著作権上の問題も絡んでおり、教員自身の情報教育も求められる。

実際、その問題が大学院教育にも影響を与えている。ある種情報の羅列的な論文というものが増えているような印象を持っている。

もう一つは、確実な情報と不確実な情報の選別ということで、カミングス先生が示した8つ

の基準はとても参考になる。ただ、ハイブリッドリテラシーという概念について、その意義をもう少し説明していただきたい。

ウェブ上の学術情報については、匿名性と責任の所在の問題があり、信頼のおけるサイトのリンク集を作成することも、1つの課題になる。間違ったネット上の情報をどういうふうに活用するかという議論も他方である。30年前、アメリカの研究者が、トゥネブー・ノック・カルトというカルト団体を、意図的に誤情報を流して、その反応を研究者の間で見たということがあった。カトリックの修道会のような新しい宗教団体があったらどういう評判を獲得するかということの調査であったが、そういう情報の使い方もあるのかなという印象を持った。

もう一つは、研究者のコミュニティの形成ということが必要なのではないか。宗教情報に対するフィードバック体制の確立ということが必要なのではないか。誤った情報は情報源から正されることが望ましい。

私がかかわっている南山宗教文化研究所でも宗教情報を提供しているので、1つの事例としてお見せしたい。

宗教文化研究所では『ジャパニーズ・ジャーナル・オブ・レリジヤス・スタディーズ』とか、『エイジアン・フォークロア・スタディーズ』、『エイジアン・エスノロジー』という雑誌を出しており、現在それらがすべてオンライン上で読むことができる。

一つの試みとしては、オンラインで編集をするということがある。ソースブックと言われる、日本哲学資料集を作成しているが、それぞれの寄稿が全部オンラインで読める。ゲラ刷りをネット上に展開し、PDFで構成して、また送り返すという作業を行っている。

7. 総合討議

まず、Cummings氏がハイブリッドリテラシーという言葉で表現したかったことについて補足説明がなされた。現代の学生のメディアリ

テラシー、情報リテラシーを考えるさい、文字だけでなく、視覚的、聴覚的なものにも魅了されている点をまずおさえることと、学生のコピー・ペーストという行為をたんに怠けていると評価するのではなく、さまざまな情報収集法のひとつとしてとらえなおし、従来からの私たちの情報収集法と照らし合わせ、対話させる必要があると述べられた。

次に、宗教文化教育という概念が日本でも出てきた文脈についてButel氏から井上氏に対して質問がなされた。日本には宗教を語ることや宗教情操教育への警戒感があり、それによって、とくに公立の学校では宗教文化について触れられないという事情があること、もう1つは、フランスと同様に日本でも伝統宗教についての知識が薄くなっていることがある。グローバル化、国際化が一層進むと、外国の宗教文化についての知識も今まで以上に必要になる。そこで、批判が出やすい「宗教教育」という言葉の代わりに「宗教文化教育」という概念を打ち出した。結果として、宗教文化について知ること大切だという回答が8割を超えるという調査もあり、ポジティブな反応を得ている。

Wachutka氏の言及した、ドイツにおける日本学での神道の理解について、中野裕二氏（國學院大學）より、神道には言語で表出される部分と行為で表出される部分、ビジュアル的な部分とがあり、これまでドイツの日本学では言語を通じてしか神道を理解できなかったのが、他の要素を通じて理解できる道を開いたのではないかと、そういうところへの関心をドイツの学生や研究者が持ち始めたのかどうかを質問した。Wachutka氏は、たしかに学生たちはフローレンツが翻訳、注釈した文献よりも、儀礼の映像やアニメ、神話のなかの面白い話など、刺激的なものに興味をもつ傾向があると答えた。

稲場圭信氏（神戸大学）は、海外で一人ひとりの研究者がブリコラージュで情報発信していることについて、Web2.0の流れのなかで、共同のプロジェクトに参加しつつそれぞれが発信

する営みを継続することも評価すべきではないかと問題提起し、Butel氏も同意した。

またButel氏はフランスでは中学2年から世界の宗教を学ぶが、カトリックのことを教えると親から反対の声が出て、イスラームについては反対の声が出ないという。それは後者については教科書に書いてある事実のみを伝えることになるからである。それはいいかもしれないが、やはり宗教は事実だけではなく、人間の経験ではないか、それを研究者としてはどう伝えたらいいかという疑問をもったという。またこれに関連して、渡辺学氏より、フランスの異文化に対する態度やカルト警戒教育の現状についてButel氏に解説を求めた。カルト、セクトの概念に関しては、フロアからも、またCummings氏からも北アイルランドの問題にからめてコメントがなされた。

久保田浩氏（立教大学）より、インターネット上において、当事者の自己表現のような内容が、研究者からのフィードバックによって学術的なものになっていく可能性について質問が出された。これに対し師氏は次のように答えた。研究者はジャーナルを中心とする知識生産の仕組みを前提としがちだが、ウェブでは、主体性の希薄な人たちのささやきやブリコラージュが大きなメッセージ、影響力をもつことがある。たとえば京都の太秦に木嶋坐天照御魂神社という神社があるが、その三柱の鳥居が地元の人も含めてユダヤ人がつくったものであると思ってしまう。

そういうなかで専門家がフィードバックすることには、ある種の無力感もある。

Cummings氏は、間違った情報であっても、それは扱い方によってはよい資料になる場合もあるので、今までの教授法とは違う教授法を見つけなくてはいけないと答えた。

また、4月から教壇に立つ予定の大学生から、宗教文化教育の教材を子どもたちに提示するときに注意すべき点を井上氏に質問した。

井上氏は、宗教文化教育には価値観をどう扱

うかという問題があり、人々が大切に思うからこそ続けている行事があるということを理解する必要があるが、そのことと価値観を教えることとの線引きはなかなか難しい。カルトに関しても、最終的な決断は相手にあるけれども、ただこれだけは知っておいたほうがいいのではないかということを手探りでやるしかない、と答えた。

また、埼玉県の中教員から、宗教について価値相対主義的に教えることは、宗教の大切さを教えることと矛盾するのではないかという質問がなされ、井上氏からは、宗教に価値がないということではなく、違う価値観をもつ者同士が衝突するリスクを回避するという発想をもつかどうかということであるという応答がなされた。

また、初等教育における倫理教育、道徳教育との関連についての質問がなされたが、井上氏はそれらとははっきりと線を引いていると答えた。

島根県で行われている博学連携による小学生の神話の学習について、同様の取り組みがフランスなどでもあるかという質問がなされた。Butel氏は、ケ・ブランリー博物館には植民地時代の収集物が展示されており、宗教的なものが多いが、子どもに対する宗教文化教育には結びついていないという。

また、知識だけでなく経験を教えるということに関しては、日本の公教育では憲法の政教分離原則から難しいこと、しかし最近の教育基本法の改正で宗教の大切さを教える必要が謳われており、ではどのように教えるかという難しさがあるという意見がフロアから出された。

これに関連して、イギリス、ドイツの宗教教育の現状について、Cumming氏、Wachutka氏、Butel氏から補足説明がなされた。イギリスでは多文化社会を前提として国のカリキュラムとしてさまざまな宗教伝統を比較して紹介している。ドイツでは、中学・高校でカトリックとプロテスタントを区別してそれぞれの授業があ

り、教会のヒエラルキーや基本的な儀礼を教えている。フランスでは、小学校では宗教にはまったく触れず、中学校で事実についてのみを教える。校長先生から親へ、宗教について扱うことを報せる手紙が届けられる。聖書やコーランなどの教典の原文を読むことは、距離をとることが難しいためか、行われない。

以上のように、宗教文化教育という概念やそのスタンスを生じさせている日本の現状をイギリス、ドイツ、フランスの状況とも比較しながら共有しつつ、インターネットの影響による教育・学習環境の変化のなかで、メディアリテラシーの涵養、価値観の衝突によるリスクの回避という視点、ブリコラージュをつなぐ協働の可能性などが多角的に検討された。